

国立国語研究所学術情報リポジトリ

明治時代の言語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001574

明治時代の言語

国立国語研究所

昭和48年11月

明治時代の言語

I 明治時代語研究の意義

1 明治時代の近さと遠さ

「降る雪や明治は遠くなりけり」という句は中村草田男の作であるが、この句は、明治百年といわれる今日において、二つの立場から理解されるように思われる。一つは、明治時代に生まれた人々の、なつかしく心理的に

近い時代としてであり、一つは戦後に生れた人々の、全く明治を知らない人々の客観的遠さとしてである。明治時代語に対する反応も、この二つの立場によって分かれるであろう。そして明治維新と太平洋戦争とは、恐らく日本の歴史において、もっとも大きな社会変革の時期として、とらえられるであろう。

明治維新は、身分制度の崩壊、太平洋戦争は男女平等の確立によってもっとも特徴的に示すことができよう。

2 明治時代語研究のはじまり

明治時代語の研究は、この二つの立場から行われている。前者は現代語として、後者は

- I. 明治時代語研究の意義
- II. 新聞の用語
- III. 学術書の用語
- IV. 翻訳小説の用語
- V. その他の成果
- VI. これからの研究の方向

近代語としてであって、二つの立場が明瞭に反映している。いいかえれば、前者にとっては当然のことであっても、後者にとっては全く未知の世界である。それだけに太平洋戦争まで、明治時代の言語についての客観的研究はほとんど行われていなかったと言っても過言ではない。

そのような状態の中で昭和三〇年、国立国語研究所に、近代語研究室がおかれ、明治時代語の調査が始められたことは、画期的なことといわなければならない。国立国語研究所で報告した『明治初期の新聞の用語』（昭和三四年）は、明治時代語研究の本格的幕あけであったといつてよい。

3 明治時代の言語生活

明治時代の言語を研究するには、明治時代に、どのような言語生活が行われていたかを知る事が、研究をはじめにあたって便宜が多い。近代語研究室では、全国の大学や公立、私立の図書館をめぐって、表記・文体を基準として、近代語研究の資料となる文献の調査を行っている。また、話しことばの資料として、明治時代に生きた人々の談話の録音を試みたこともある（『国立国語研究所年報16（17）』）。その結果、およそ次のような言語生活の実態が明らかになってきた。まず、話し言葉の世界は、福沢諭吉が「旧藩情」で「隔壁にても人の対話を聞けば其上士たり下士たり商たり農たるの區別は明に知る可し」とのべているように、明治初期においては、江戸後期と同様にそのことばづかい、また、用語によって、士・農・工・商の身分が知られた。そのような実態をよく示しているのが『安愚楽鍋』（明治四年）である。そして、明治も二〇年ごろになると、官員が時代の花形となり、演説やその速記が行われた。これは、明治時代の言語生活における特徴である。そし

て、しだいに身分制度を反映することばが整理統合されていった。明治三〇年ごろになると、「しちやう」「しちやうた」という完了表現があらわれ、新しい東京語が形成されていく。一方、書きことばにおいては、明治初期は文体に、漢文体・漢文直訳体（漢文書き下し体）、和文体・欧文直訳体があり、明治二〇年をすぎると、言文一致体が試みられ、三〇年ごろには、普通文が成立したように思われる。そしてそれらの文体の文章を表記するために、漢字・片仮名・平仮名が用いられ、漢字には振り仮名をつけることが行われた。明治初期においては、漢字をよめる人は知識人にかぎられ、片仮名もそれに近い状態であった。職人などは、お布令をよむこともできなかった。土族以外は、わずかに、寺小屋にかよった人々が、平仮名をよむことができたにすぎない。清水卯三郎の「平仮名ノ説」の「片仮名ヲ知ル者モ亦天下多シトセズ是ヲ以テ余ハ只平仮名ヲ用フルヲ主張ス凡平仮名ノ通常タル招牌暖簾票帖神史ノ類觀テ見ルベシ」¹⁾「田舎源氏自來也物語膝栗毛八笑人義太夫本浄瑠璃本ノ如キ婦女童子モ之ヲ読ンテ能ク感動シ或笑ヒ或哀ム」はこの事実をよく示している。したがって、平仮名が読める人を

対象とした文章は、総ルビで漢字平仮名交り文が普通であった。反対に、漢字片仮名交り文は、ペナルビか、ルビなしで、知識人を対象とした文章であった。しかし明治五年学制がしかれ、全国民に教育が普及し、文字が読めるようになる、教育効果の上から、漢字制限が強く主張され、国語国字問題がやかましくなり、明治三五年国語調査委員会が発足し今日の国語審議会にうけつがれた。

4 明治時代語研究の資料

明治時代の言語は、それぞれの言語生活を反映した資料を調査したとき、はじめてその体系を明らかにすることができる。しかし、明治以降の文献は無限に近く、これをすべて調査することは不可能に近い。そこで記録されたものを調査対象とすると、それぞれの文献を等質の言語を反映するグループに分類しその代表的文献を調査する以外に方法は無い。そこで、文献が現実の日本語を、どのようにに反映しているかその信頼性を基準とする、およそ次のように分けることができる。

A 日本人が公的に発表する意図をもった文献（日本人の公的著作）

B 日本人が公的に発表する意図をもたなかった文献（日本人の私的著作）

C 外国人が記述した日本語文献（外国資料）

D 日本語に翻訳した文献（翻訳資料）

E 日本語を速記した文献（速記資料）

F 日本語を録音した資料（録音資料）

G 日本人の日本語研究書

そしてこれらの性格をあわせもった資料に、新聞と雑誌がある。これは一つ一つの記事や論文に分ければ、A-Gに属させることができる。しかし実際には別に一項を認めたいほうが便利である。

H 総合資料（新聞・雑誌）

これらの資料を、会話の部分を話しことば、地の文を書きことばの資料に分けて考察するとき、明治時代の言語は、その実態が明らかになってくるはずである。

5 明治時代語研究のもつ意義

明治時代語の研究は、明治時代を近く感じる人にとっても、遠く感じる人にとっても、その実態を客観的にとらえる必要がある。なぜなら、現在、われわれが日常使用している

日本語のかなりの部分が、明治の文明開化とともに輸入された西洋文明の翻訳語、あるいは、そのまま輸入した外来語だからである。

いいかえれば、現代語の直接の源流は、明治時代語といふことができる。したがって、明治時代語を現代語と比較するとき、はじめに現代語の成り立ちが明らかになり、明治百年の日本語の歴史において、どのような要因によって日本語が変化したかを知ることができるのである。これはまた、将来の日本語の方向を予測する手がかりとなるのである。明治時代語の実態を明らかにするという地味な基礎的研究が、直接・間接に、国語国字問題に役立つのも、この点にある。

国立国語研究所が、近代語研究室を創設し明治時代語の研究を行っているのは、このような見地からであり、その意義はきわめて大きいといわなければならない。

以下、国立国語研究所で行ってきた明治時代語の調査研究の結果を、新聞の用語、学術書の用語、翻訳小説の用語、その他の成果の順で紹介しよう。

II 新聞の用語

国立国語研究所で行った明治時代の新聞用語の調査には、郵便報知新聞（大新聞）と読売新聞・東京絵入新聞（小新聞）とがある。

大新聞は、知識人を対象とした新聞で、記事による違いがあるが、漢字片仮名交り文が主でルビなし、小新聞は、童蒙婦女子といわれる寺小屋教育を受けた人々を対象とし、漢字平仮名交り文で平仮名の総ルビつきである点に特色がある。文体も、大新聞は漢文直訳体が中心で、小新聞は俗文体と談話体が中心であった。この大新聞と小新聞との相違は、野崎左文の「私の見た明治文壇」における対照表が要領よくまとめている。

〈大新聞〉

- 一、紙幅の広き事。
- 二、社説を掲げて政治を論ぜし事。
- 三、社説、雑報、寄書、其他の記事にもすべし傍訓（ふりがな）を施さざりし事。

四、雑報は、専ら政治経済上の事件を報じ、花柳界、演芸界、其他卑俗の記事は、新聞の品位を墮すものとして掲載せざりし事。

五、雑報の文は概して「したり」、「せし由」の文章体なりし事。

六、小説を掲げざりし事。

七、一枚の定価は二銭以上なりし事。

八、売子をして呼売を為さしめざりし事。

〈小新聞〉

一、紙幅の稍や狭き事。

二、社説を掲げず、政論には殆ど無頓着なりし事。

三、官令（おふれ）、雑報（はなし）、寄書（よせぶみ）、等にもすべて振仮名を施せし事。

四、政治上の記事は至極簡単にして重みに市井の出来事、花柳界、演芸界の通信、及び艶種と称するものを掲げし事。

五、雑報の文は「御座います」「ありました」等の俗談平語体なりし事。

六、続き物と称する小説を連載せし事。

七、一枚の定価は八厘より一銭五厘なりし事。

八、昔の読売に習い、是は今日発行の何々新

聞と呼びあるく者ありし事。

1 郵便報知新聞の用語

郵便報知新聞の用語については国立国語研究所報告15『明治初期の新聞の用語』（昭和三四年）と『国立国語研究所年報7〜10』に報告されている。

〔調査目的〕

この研究の目的は「郵便報知新聞」の明治一〇年（一八七七）一月から明治一一年一〇月までの一年分（約一二八万語）を対象として標本調査によって、語彙（いわゆる自立語）を概観し、さらに、表記・語構成・文体助詞・助動詞などの実態を明らかにしようとしたものである。底本には国立国語研究所蔵の原本を使用した。

〔調査方法〕

標本調査法は、層わけ等間隔抽出法を用い文体と記事内容の違いを考え合せて、本文を五層に層別した。

a 層 公布公開録事（官庁からの公示事項）

b 層 社説

c 層 雑報（府下・西京・大阪・諸県に分か

れている）

d 層 外国通信記事

e 層 雑（投書・論説・その他）

調査単位には、文節に近い「 α 単位」（『明治初期の新聞の用語』一九ページ以下、『年報10』一七七ページ以下参照）を用いた。抽出にあたっては、行を抽出単位とし、どの層も二分の一の抽出比で標本を抽出した。採集した標本の延べ語数は九九、三八四語、標本の異なり語数は、人名・地名・数詞を含めて、二八、三六四であった。この中から、人名・地名・数詞をひくと、採集語数八七、三一五、異なり語数二二、二七二であった。

以上の標本調査は、十二分の一の比率であって、十二分の十一が調査されていない。そこで別に採集もれの新しい言葉が、どのくらいあるものか、調査者の主観によって、どのくらい異なり語を追加できるかの補充調査も試みた。採集カード枚数一三、四三三、人名・地名・数詞などを除いて、一三、一三三であった（『報告書15』二七〜二九ページ、『年報9』一一〇〜一二二ページ参照）。

〔語彙表〕

調査の結果、作成した語彙表は次の通りである。

1、使用度数一〇以上の異なり語の表(A表)

(1)五十音順A表……使用度数一〇以上の

異なり語一、四二一(人名・地名・教詞を含む)

(2)使用率順A表……使用度数五〇以上の

異なり語一九七(人名・地名・教詞を含む)

2、使用度数九〜一の異なり語の表(B表)

(3)五十音順B表……使用度数九〜一の異

なり語二〇、九九二(人名・地名・教詞を含まない)

3、補充調査の結果、あらたに追加された異

なり語の表(C表)

(4)五十音順C表……異なり語八、六一六

(人名・地名・教詞を含まない)

4、接辭的要素の表(別表)

(5)分類式別表……接辭的要素を、性質によつて六種に分け、おのおのを五十音順に配列した表。

これらの語彙表は、いずれも、国研報告15『明治初期の新聞の用語』におさめられている。なおこれらの語彙表では、見出しの立てかたが、活用語の場合、動詞は連用形、形容詞は語幹になっているので、注意する必要

がある。

分析の結果は、およそ次の通りである。

〔表記〕

① 送りがないで目立った傾向は、動詞では、上二段活用、下二段活用のなかに、たと

えば「過グ」が連用形は「過ギ」、連体形は「過ル」の形をとるような例が多く見られた。また「止マリ」「極マリ」「備ナへ」「苦ツミ」「免カレ」のように、自他の対応のある語や、形容詞からの転成語、および三音節以上の語

などには、語幹の一部から送るものがみられた。なお動詞では、活用語尾を送らないものがあるが、これは、「テ・バ・タリ・シム・リ・ベシ・候・コト・モノ」などにつづく場合に多いようである。また「彼レ」「己レ」「皆ナ」のように、漢字一字からなる語に、送りがなを送る傾向があった(『年報9』

一二五〜一三五ページ参照)。

② かなづかいで問題がある語は、動詞にもっとも多く現われ、「え」を「へ」としたものの、「う」を「ふ」としたものが多かった(『年報9』一三五〜一三八ページ「仮名づかいの表」参照)。

③ 漢字とかなどの割合は、無作為に選んだ明治十一年一月一日(木曜)の一日分では、

は、

本文の総字数 一〇、三七九字

漢字

かな

片仮名

平仮名

変体がな三〇〇字を含む

六、〇九四字 五八・七%

四、二八五字 四一・三%

二、二二二字

二、〇六三字

四一・三%

では、ほぼ三対二の割合で漢字とかなが用いられていた。なお、層別にみると、b層(社説)〈漢字片仮名交り文〉は、c層〈漢字平仮名交り文〉より漢字に対するかなの割合が多い。

④ ルビは、漢字平仮名交り文に多く、それは平仮名であった。たとえば、使用度数九〜一のア行のルビつき語八八〇例では、八七二例が漢字平仮名交り文に現われ、平仮名ルビであった。残り八例は、漢字片仮名交り文に現われ、五例が、片仮名ルビであった。

⑤ 文字には、変体仮名・合字などが見え、変体かなは、平がなになり、ハ・ヨ・ホ・フ・ウ・ツ・ヰ・ヱ・ム・チ・ヤ・シ・ロ・リ・ノ・井、平仮名に、カ・モなどが用いられている。合字は、片仮名に、1・氏・ノ・井、平仮名に、カ・モなどがある。

⑥ 濁点・半濁点・句読点では、濁点はあ

まり用いられていない。半濁点は、プロテスタント、ペンキ塗り、パンパンと、アンパンなど、主として、片仮名表記の語に用いられている。句読点は、ほとんど用いられていない。

⑦ 会話文と地の文との区別はされていない。しかし、二例ほど、会話文を区別したものがあつた。一つは、漢字片仮名交り文の中に、会話文を平仮名で表記したものである。

一日其親友ナル「チャールズ」ハ方サニ穴鑿リニ取り掛リタル「ゼームス」ニ向ヒイカニ「ゼームス」殿此頃の流行病ハ足下の仕事も大繁昌ゆヘズッシリ金の儲かるぞであるふ実ハ羨まじきぞなりと言ヒタルニ「ゼームス」ハ如何も仕事の忙しき程金も儲かり升併し今鑿り掛りたる穴ハワイフ(細君)の用ハ備ふるなりト答ヘタリトハ(明治一一・六・二六e)

他の一つは、「」を用いたもので
同氏カ先キニ公言シタル「余ハ余カ黨中最モ國家ノ用ヲ為ス者ノ為メニ最モ力ヲ盡サントス」ノ語ハ蓋シ不朽ノ語ト為リ
(明治一〇・一一・一七・d)

⑧ 文の表記についてみると、郵便報知新聞の文章の特色は、層・文体・記事の内容な

どの違いによって漢字片仮名交り文、漢字平仮名交り文が、およそは区別されていることである。a層(布告)は候文体で漢字片仮名交り文、b層(社説)は、漢文直訳体で漢字片仮名交り文、c層(雜報欄)は、記事内容の違い、あるいは文体の違いによって漢字片仮名交り文と漢字平仮名交り文とに区別されている。d層(外国通信)では、電報の翻訳は漢文直訳体で、漢字片仮名交り文、外国事情の説明には、漢文直訳体だが、漢字平仮名交り文もみえる。e層(投書欄)は、文体も内容も雑多で、両様がみられる。

〔漢字語の構成〕

① 三字の漢字で表記してある語を分析した結果、〈○○的〉〈○○性〉という最近よく用いられることばづかいが、〈○○的〉は「絶大的、可及的」のたった二語、〈○○性〉は全く用いられていなかった。

② 複数の構成要素からなる語の要素間の關係をみると、二種類の字順のあるものがみえた。

酒造家―造酒家 淫賣女―賣淫女 海陸軍―陸海軍 貸席業―席貸業 管保者―保管者 奉迎送―奉送迎 位牌―牌位 拒抗―抗拒 行舉―舉行 行旅―旅行

始終―終始 治療―療治 熟練―練熟 授受―受授 定約―約定 炭薪―薪炭 競漕―漕競 送輸―輸送 爭論―論爭 溜滞―滞溜 奪掠―掠奪 判裁―裁判 美善―善美 勞苦―苦勞 漕運―運漕 送通―通送 轉移―移轉 今日の普通の字順と逆と思われる語もある。

困苦酸辛 進退出處 專心一意 諫賦法 工商者 戍衛兵 糧食費 硬強 恨怨 鑿掘 肆橫 峻改 順從 暑寒 進前す 勢威 制禁 靜冷 爭鬪 展輒 督監す 忍堪す 變改す 緣由 洋和 隣近 轢 軋 鱸舳

〔文体と用語との連関〕

郵便報知新聞の文章は、記事の性格に応じて、文体が異なるが、これを、

- (イ) 候文体
 - (ロ) 漢文書き下し文体の系統と見られる、「かたい」文体(硬文体)
 - (ハ) 『西洋道中膝栗毛』などの文章とも連関すると思われる、(ロ)に比べて「やわらかい」文体(軟文体)
- の三種に区別すると、文体と用語との間に連関があり、文体を特徴づける用語群が明らか

になった(『明治初期の新聞の用語』三〇五ページ参照)。一つの試論としてはあるが、文体を特徴づける顕著な指標を指摘している。

〔助詞・助動詞〕

① 明治初期の書きこことばの助詞・助動詞には、案外知られていないことが多い。郵便報知新聞の中にも、たとえば、格助詞「を」「に」「より」に、変わった用法がある(『年報10』一七八ページ参照)。

〔ヲ〕(今日では「に」を用いるところ)

太政復古の基業を策し夙夜勵精猷替規畫以て今日の不續を賛成し候段観感斜ならず(明治二・五・二〇c)

討議ノ末起立ヲ命シタルニ本案ヲ賛成スル者 廿七人(明治一・四・一六e)
又世人ハ政府ノ處置一モ自由主義ヲ背戻スルアレハ喋々之ヲ虐政ト呼ビ(明治一・一八・八b)

〔ニ〕(今日では「を」を用いるところ)

時計の如キハ外飾甚タ醜疎ナルハ其ノ價三十圓ニ下ラス(明治一〇・一二・三b)
都鄙ニ由テ等差アレハ大抵右ノ錢高二ニ甚タシク上下セズ(明治一・一六・二六d)
然るゝ此三月中収入の割合にて上進せぬ

此年度中の収入ハ必らず八九十万圓ノ豫るを知ヘシ(明治一・一八・二二c)

起業公債募集の形勢ハ茲又廿一日の計算にて千三百五十万二百圓の額を為シ己募集額ヲ起過する云々(明治一・一七・二四c)

〔ヨリ〕(今日なら「に」を用いるところ)
何に依らず御好みのものを鏡より寫して見せ申さんと云ひければ(明治一・一七・二七e)

所謂人盛ナレバ天ニ勝ツモノニシテ徳川政府ノ嚴法ヨク航海術ノ進歩ヲ妨ケタルヨリ外ナラズ(明治一・一・一〇c)

② 郵便報知の自立語に助詞・助動詞が、

どんな割合で現れているか調べると、自立語一〇につき、附属語六・五の割合であった。

そこで、先の十二分の一のサンプルから、かきねて五分の一を抽出し、助詞一〇、〇二二(延べ)、助動詞二、八二九(延べ)を採集し、そのサンプルに現れた限りの用例で、助詞およびそれに準じるものは七九種。また助動詞およびそれに準じるものは三二種であった(『年報10』一八〇〜一八一ページ参照)。

③ 文体と助詞・助動詞との関係を調査すると、硬文体、軟文体、候文体で次のような

状況が推察された(『年報10』一八二頁参照)。

〔硬文体でよく使われたもの〕

助詞——ども(接) のみ(副) や(終)

をして(格) をもって(接)

助動詞——ざり(打消) たり(指定)

〔軟文体でよく使われたもの〕

助詞——が(接) ど(接)

助動詞——ず(打消)

〔候文体でよく使われたもの〕

助詞——でう(接) ところ(接)

助動詞——さうらふ(丁寧)

2 読売新聞と東京絵入新聞の用語

〔調査目的〕

読売新聞と東京絵入新聞は、小新聞に属しおもに、談話体と俗文体で書かれている。そこで小新聞の用語の性格を明らかにし、また軟文体の用語を採集することを目的とした。

〔調査方法〕

調査対象は、明治一一年七月から、明治一二年六月までの読売新聞と東京絵入新聞の一年分とし、そのサンプル調査を行った。調査範囲は、談話体と俗文体を主とし、候文と漢

文直訳体の部分をのぞくため、雑報欄（社会面、三面記事）と、投書欄とを調査した。

サンプリングは、一年分の母集団約三〇〇日分（一日は四面であるから一二〇〇面）の中から、月の上旬、中旬、下旬から無作為に各一日を抜き取り、さらに、当該の一日から、一面を無作為に抜き取った。こうして、読売新聞、東京絵入新聞、各三六面を得た。調査には無作為抽出法と補充調査法を用いた。無作為抽出法は、七行から二行を抜き取る一種の等間隔抽出法を用い、行の全用語を採集した。補充採集法は、無作為抽出法で抽出されなかった残りのすべての行から、採集もれの見出し語のすべてを採集しようとしたものである。調査行数は、読売新聞二、七六〇行、東京絵入新聞二、四七五行。調査単位は、だいたい文節に近い α 単位を用いた。採集枚数は、無作為抽出法で、読売五、五三四枚、東京絵入が五、四四六枚であった。補充採集法では、読売三、二二六枚、東京絵入三、三三二枚であった。異なり語数は、読売—無作為法二、二四五。補充法二、七〇四。東京絵入—無作為法二、四一三。補充法二、六七九。

〔語彙表〕

①五十音順語彙表（無作為抽出法と補充採

集法で得た異なり語八三九四語）

②使用度数一〇以上の使用度数順の語彙表
〔年報12〕九五〜九七ページ参照

③接辞的要素の表

〔読売新聞と東京絵入新聞の用語〕

無作為抽出法によって得た語の使用度数一〇以上の語を比較してみると、読売で使用度数一〇以上の語が五九語、東京絵入では五四語で、両者に共通の語は、三一語であった。読売新聞と東京絵入新聞との違いは、東京絵入に、文語形の用語が多いことで、それは「有ル・有リ」に顕著に出ている。また、読売には、「昨日・此程・今日・昨日・同所」など報道に必要な、いつ、どこでという用語、あるいは「同・同所」のように、同語の反覆をさける新聞記事に特色のある用語が多い。また、筋（其の筋）・火事・懲役という語も読売に多く、東京絵入の、つや種の多い記事の傾向と、違いをはっきり示している〔年報12〕九七〜九八ページ参照。

〔大新聞と小新聞の用語〕

郵便報知新聞の各層と読売・東京絵入との用語の重複をしらべると、郵便報知新聞の雑報欄の用語と重複するものが圧倒的に多い〔年報12〕九四ページ。次に大新聞と小新

聞の違いをみると、無作為抽出法の使用度数一〇以上の語では、小新聞には、口語形の動詞・形容詞が多い。これは小新聞に談話体が多いので当然である。大新聞にあって小新聞に全然あらわれないのは、「及ビ」「曰ク」、あまり用いられないのは「至ル」「得」「為ス」「依ル」であるが、これらは、文章語系統の用語だからであろう。

大新聞と小新聞で対照的な類義語には、日時に關するものがあり、大新聞の「昨日」「昨日」「本月」「去月」は、小新聞で「昨日」「昨日」「今日」「先月」となっており、大新聞の「妻」は小新聞で「女房」、「死ス」「死亡」は「死ヌ」になっている。なお、この調査では、談話体と俗文体とを区別せず、軟文体として一括しているが、談話体と俗文体との用語の違いは、調査する必要がある、今後の課題である。

〔小新聞の表記〕

郵便報知新聞の表記と異なる点は、本文が総ルビであること、濁点・半濁点が全部つけてあること、漢字片仮名交り文のないこと、三点で、他は同じである〔年報12〕一〇四ページ参照。

III 學術書の用語

〔調査目的〕

いわゆる文化的用語の地盤は、主として明治初期に形成されたと考えられる。もちろん医学・薬学・物理・化学・天文などの技術的領域では、蘭学などを通じて早くから、いろいろの訳語が流行し、また定着したのであるが、明治維新とともに、法律・政治・経済・哲学・教育・美学、その他の學術・文物・制度の広い領域にわたって新しい用語が数多く現れては消えていった。この調査は、明治初期に新しく発生し、交替し、変遷し、消滅あるいは定着した用語の様相をとらえるため、また、硬文体の用語を補充する目的で行われた。

〔資料〕

資料は、明治一〜二〇年に刊行された次の二三種五二冊である。いずれも、底本には、国立国語研究所蔵の原本を使用した。なお、

(1)と(2)は、同一の雑誌であるが日本人の作品と翻訳作品に分けたので、二種としてかぞえた。

〈日本人の作品〉

- (1) 山田俊蔵・大角豊次郎著「近世事情」(全三編) 七冊 明治六
- (2) 加藤弘之著「国体新論」一冊 明治八
- (3) 高橋易直編「明治文抄」三冊 明治一〇
- (4) 高橋易直編「続明治文抄」四冊 明治一〇
- (5) 福沢諭吉著「福沢文集」二冊 明治一一
- (6) 田口卯吉著「日本開化小史」六冊 明治一一
- (7) 大月疇四郎編「日本暗射地図教授法」一冊 明治一一
- (8) 渡辺修次郎著「明治開化史」一冊 明治一三
- (9) 福沢諭吉著「民間経済録」二冊 明治一〇
- (10) 福沢諭吉著「時事小言」一冊 明治一四
- (11) 『東京学士会院雑誌』(明治一五年度合本) 一冊 明治一五(日本人の作品)
- (12) 藤田茂吉著「文明東漸史」一冊 明治一七
- (13) 青田節アヲノフ著「内地雑居之準備」一冊 明治一五

治一九

(14) 藤田武城編「文明実地演説」(前) 一冊 明治二〇

〈翻訳作品〉

- (15) 巴命馬バシロウ見顧(独)著 福地源一郎訳「外交際公法」二冊 明治二一
- (16) 芙蘭志須フランジス英蘭士(英)著 小幡篤次郎訳「英氏経済論」(卷一〜三) 三冊 明治四
- (17) チェンバース(英)著 前田利器訳「百科全書」(商業編) 二冊 明治七
- (18) 斯篤宇(英)著 島田脩海訳「消毒新論」一冊 明治七
- (19) 弥兒(英)著 林董・鈴木重孝共訳「弭児経済論」(初編) 八冊 明治八一〜一五
- (20) M・デューチャレト(仏)著 刀根宗二郎訳「娼婦論」二冊 明治一〇
- (21) 埃・哥烈曼著 平塚平訳「夫婦衛生論」一冊 明治一五
- (22) アルフェース・トッド(英)著 尾崎行雄訳「英国議院政治論」(首巻) 一冊 明治一五
- (23) 『東京学士会院雑誌』(明治一五年度合本) 一冊 明治一五(翻訳作品)

〔調査方法〕

用語の採集には、客観法(標本抽出法)と

主観法を用いた。客観法は、ページを単位に、三〇分の一の比率でサンプルを無作為に抽出し、サンプルに当たったページのすべての語を採集した。採集語数は一四、九八〇であった。母集団の推定延べ語数は、助詞・助動詞を除き、約四五万である。主観法は、使用度数の低いと思われる用語を主観的に抜きだして採集するやり方で、ページを単位に、四分の一の比率でサンプルを抽出し、サンプルに当たったページ全体から必要な用語を採集した。採集語数は一四、二九二であった。調査の結果、次の語彙表を作成し、分析を行った(『年報10-11』参照)。

〔語彙表〕

①五十音順語彙表、第一表(主観法・客観法の採集用語をあわせたもの。ただし人名・地名・数詞を除く)

②五十音順語彙表、第二表(客観法で採集した用語のうち、使用度数一〇以上のもの)
〔使用度数と使用範囲(出典数)との相関関係〕

明治初期の学術・論説的文獻二三種の客観法による使用度数の高い語の度数順位一〇位までみると、次のようになる。

使用度数	順位	語数	語例
三五一以上	一	2	有り 其ノ
二五〇〜三〇〇	二	2	之者
二〇〇〜二五〇	三	1	事
一五〇〜二〇〇	四	4	言ウ 此ノ 為無シ
一〇〇〜一五〇	五	2	所人
七〇〜一〇〇	六	1	時
六〇〜七〇	七	2	至ル 亦(副)
五〇〜六〇	八	3	得 政府 為
四〇〜五〇	九	5	多シ 即チ 為ス 或ハ 以テ(副)
一〇	一〇	2	或ハ 以テ(副)

また、使用範囲(出典数)の広い語、使用文献数一六以上の語をみると、次のようになる。

出典数	順位	語数	語例
二三	一	2	有り 其ノ
二二	二	3	之 為 者
二一	三	6	言ウ 事 所 無シ 為ス
二〇	四	3	此ノ 時 亦(副)
一九	五	1	至ル
一八	六	3	或ハ 得 多シ
一七	七	1	即チ
一六	八	4	為 成ル 皆 由ル

〔注〕*印は、相手方の表にない語。

この両者を、スピアマンの順位相関係数を求める公式によって計算したところ、使用度数の使用範囲に対する順位相関係数 $r_{12} = 0.83$ 、使用範囲の使用度数に対する順位相関係数 $r_{21} = 0.78$ となり、前者の相関係数の方がいくらか強いようである(『年報11』一四一〜一四三ページ参照)。

〔主観法と客観法〕

なお、主観法と客観法との採集結果を比較すると、結論として、客観的用語採集は、いわば語彙体系の中心の現象をねらうものであり、主観的用語採集は、語彙体系の周辺の現象をねらうものに適していることが明らかになった(『年報11』一四四〜一四八ページ参照)。

IV 翻訳小説の用語

〔調査目的〕

明治初期に移入された西洋文明は、大部分が翻訳を通して日本人に吸収された。小説の翻訳もまた娯楽のためではなく、西洋文明を

移入するため、学術上に益あるものとして訳され、戯作小説とは目的の異なった高度の内容をもつものとして読まれた。したがって、漢字片仮名交り文で、漢文直訳体のものが多かった。ところが、このような翻訳小説も明治二〇年に近くなると、教育が普及し、一般女子が読者に加わったため、漢字平仮名交り文、総ルビの表記形式をとるものがあらわれた。そして、同一作品が、二通りの表記形式で訳されたものがかなりある。

この調査は、その一例であるリットン『マルツラ、パース』と『アリス』を翻訳した漢文直訳体の『欧洲奇事花柳春話』（丹羽純一郎訳 明治一一一―一二）と、和文体の『通俗花柳春話』（織田純一郎訳 明治一七）の用語を、漢語を中心に、文体との関連においてとらえようとするものである。訳者の丹羽と織田は同一人物である。

なお、当時の翻訳は、今日の翻案に近いもので、青木輔清の『無類捷徑英学童子解』（明治一八）には、直訳と翻訳を区別して次のように述べている。

原語ヲ字綴^フ通リニ極読^ニスルハ、則チ彼國ノ言語ナリ、之ニ邦訳^ヲ施シ、転動^ヲ附ケテ一語モ残ラズ、直ニ之ヲ読ムヲ直訳ト

云ヒ、又原語ノ順序ニ拘ラズ、唯原文ノ意味ヲ採^ルテ之ヲ我ガ文ニ翻案シタルヲ翻訳ト云フ

『花柳春話』の翻訳も、後者のようなものであった。底本には国立国語研究所蔵本を使用した。ただし、『通俗花柳春話』は合冊本を用いた。

なお、この調査は現在継続中である。

〔調査方法〕

用語の採集は漢文直訳体和和文体との比較のため、自立語の全数調査を行った。調査単位は、文節であるが、漢語については次のように扱った。

(1) 並立語は一単位とする。

(例) 真善美・花鳥風月・唯々諾々

(2) 連体修飾語+被修飾語は一単位とする。

(例) ○○○式○○○的○○○普通学

士・人寰交際

(3) 「漢語+漢語」+の+十言の関係で、

「漢語+漢語」が主述の関係、連用修飾語+被修飾語の関係にあるものは、一単位とする。

(例) 風日美妍ノ好時節・「笑傾國」風姿

(4) 「漢語+教詞」の関係で、連体修飾語+被修飾語の関係にあるものは一単位とする。

る。

(例) 午後五時・短歌一篇

(5) 人名の姓と名は切らない。

〔語彙表〕

① 『欧洲奇事花柳春話』自立語索引

② 『通俗花柳春話』自立語索引

〔語種と文体〕

『欧洲奇事花柳春話』（以下『欧洲奇事』と略称する）と『通俗花柳春話』（以下『通俗』と略称する）の語種を比較すると、前者は漢語が、後者は和語が多い。これは文体からみて当然であるが、たとえば『欧洲奇事』の初編とそれに対応する『通俗』の部分とでは、異なり語数で、『欧洲奇事』は和語（二七％）漢語（五一％）、和漢混種語（一九％）、その他（三％）となり、『通俗』は和語（七六％）、漢語（一七％）、和漢混種語（五％）、その他（二％）となる。しかし、延べ語数になると、両作品とも和語がもっとも多くなり、語種と文体との関係は異なり語に反映するようである。

〔語構成と文体〕

語種の構成で明らかのように、和漢混種語に文体の違いが見られるので、和漢混種語動詞の語構成を調査すると、二作品の全編を通

じて、十種の類型がみられた。

- (1) 漢語十す
 - (2) 漢語十す十和語動詞
 - (3) 漢語十なす
 - (4) 漢語十なす十和語動詞
 - (5) 漢語十いたす
 - (6) 和語十漢語十す
 - (7) 和語十漢語十す十和語動詞
 - (8) 漢語十和語十す
 - (9) 漢語十和語十なす
 - (10) 漢語十和語十漢語十和語十す
- このうち、漢文直訳体の『歐洲奇事』には(1)(2)(6)(7)の四種類があり、和文体の『通俗』には十種類がある。そして後要素も、前者が「す」、「す十和語動詞」の二種であるのに対して、後者は、そのほかに、「なす」「なす十和語動詞」「いたす」がある。さらに、和語動詞の部分と比較すると、『歐洲奇事』には「う」「さる」「あたらう」「おわる」「きたる」「たまう」「つくす」の七語、『通俗』には一五語、「う」「あう」「いる(居)」「いる(入)」「おく」「こむ」「さる」「だす」「はつ」「みる」「たまう」「はべり」「まいらす」「わすらう」「たてまつる」がみえる。前者には漢文的表現の語が多く、後者には敬語動詞が多

い。

〔漢文直訳体と和文体との表現の対応〕
文体の違いによって、和語と漢語の使用度数に特色が認められたので、『歐洲奇事花柳春話』の四字漢語が、『通俗花柳春話』ではどうなっているか、その対応する表現を調べると、いくつかの類型的対応がみられる。四字漢語が並立の関係にあるもので例示すると次のようになる。

- (a) 漢語—漢語(同語)
〔文學技藝ニ疎ナリト雖氏(欧) 文學技藝に疎けれど(通)〕
- (b) 漢語—漢語(別語)
〔能ク事物ノ是非得失ヲ辨解スルヲ得ン(欧) 物の是非を辨知得べし(通)〕
- (c) 漢語—和語
〔正邪善悪ハ人性ノ自然ニ慣知スル所(欧) 世の善悪は自から人たる性の知所なれば(通)〕
- (d) 漢語—和語十の十和語
〔唱歌管絃ヲ教ユルノミナラス(欧) 教所は管絃の業のみならず(通)〕
- (e) 漢語—文
〔マルツラバースハ貧富貴賤ヲ論セス(欧) 富るも貧も貴も又賤も差別を為さず(通)〕

このように、対応する表現は同じ場合もあるが、たいしては、漢語が和語か文の形になって対応し、同じ漢語でも「是非得失」が「是非」(道理)のように、平易な漢語で対応している。これは、文体による相異を示すとともに、その文体と読者との関係を示唆している。

このほか、漢語の構成字数、品詞の分布、同一語に対する漢字表記の種類など、文体の相異を反映しているが省略する。(『年報20』24) 参照: 『言語生活』昭和四八年四月号・飛田良文「現代漢語の源流」参照)

V その他の成果

1 話しことばの用語調査

〔調査目的〕

話しことばの用語を採集するため、問答体と会話体の『交易問答』(二冊 明治二年

加藤弘藏著)と『安愚楽鍋』(三編五冊 明治四〜五年 仮名垣魯文著)を調査対象とした。この両者は、その語数が比較的少量であるので、各種文献の総索引を作成する時のための実験的な試みとして、自立語・付属語の全数調査を行った。『交易問答』の底本は、近代語研究室蔵の原本、『安愚楽鍋』の底本には、近代語研究室蔵の二編と広田栄太郎氏蔵の初編、三編を用いた。

〔調査方法〕

採集カードは、全数調査であること、文脈を長くとることが必要なため、本文をカードに騰写印刷した。自立語の調査単位は、『明治初期の新聞の用語』(一九ページ)に従い、付属語は、おおむね、『現代語の助詞・助動詞』(国研報告3)に従った。その結果『交易問答』では、自立語総数四、七二九語、人名・地名・数詞を除いて四、五〇〇語、異なり九三四語を、付属語は、助詞三、〇三三語異なり四七語を、助動詞六八五語、異なり一七語を得た。『安愚楽鍋』は、自立語数一〇、〇一九語、人名・地名・数詞を除いて、九、三三〇語、異なり四、一三一語を、付属語は、助詞七、二二二語、異なり八八語、助動詞一、五〇五語、異なり三五語を得た。

〔語彙表・索引〕

両書については、自立語・付属語の五十音順語彙表を作成し、自立語については索引を作成した(『年報12』八六〜八七ページ参照)。

なお、『安愚楽鍋』は、助詞・助動詞の索引を作成し(『年報18』参照)、自立語索引を修正して、近く刊行の予定である(『年報24』参照)。

〔語種の分布〕

安愚楽鍋 交易問答、小新聞の品詞別・語種別分布表が『年報13』の四〇〜四四ページにあるので参照された。

2 索引・目録

国立国語研究所近代語研究室で行ってきた調査研究のあらましは以上の通りであるが、ほかに、索引や目録の草稿があるので、一括して紹介する。

(1) 明治初期漢語辞書八種総索引(稿)

この索引は、明治初期の日誌・新聞・布令の漢語をあつめた分類体の漢語辞書八種の語彙を五十音順に配列したものである。漢語辞書は次の八種である。

- ① 『漢語字類』 庄原謙吉 明治二年
 - ② 『日誌字解』 岩崎茂実 明治二年
 - ③ 『令典熟語解』 伊藤正就 明治二年
 - ④ 『新撰字類』 松屋貫一 明治三年
 - ⑤ 『大全漢語解』 岩井久真 明治四年
 - ⑥ 『新撰字解』 岩崎茂実 明治七年
 - ⑦ 『掌中類聚漢語集』 楼春雄 明治八年
 - ⑧ 『音訓新聞字引』 萩原乙彦 明治九年
- なお、この八種の辞書別五十音順索引も作成されている。

- (2) 『安愚楽鍋』 総索引(近刊)
 - (3) 『交易問答』 自立語索引(稿)
 - (4) 『真政大意』 自立語索引(稿)
 - (5) 『欧洲奇事花柳春話』 自立語索引(稿)
 - (6) 『通俗花柳春話』 自立語索引(稿)
 - (7) 『舞姫』 自立語索引(稿) (森鷗外)
 - (8) 『地震』 自立語索引(稿) (森鷗外)
 - (9) 国立国語研究所蔵「明治文庫」目録(稿)
 - (10) 漢語研究に関する著書論文目録(稿)
- なお、第四研究部では電子計算機を利用して、漱石・鷗外の作品について文脈つぎの索引を作成している(『年報24』、『言語生活』昭和四八年六月号「国立国語研究所の歩み」参照)。

VI これからの研究の方向

1 明治時代語研究の視点

明治時代語の実態は、岩淵悦太郎・松村明・森岡健二・池上禎造・中村通夫・山本正秀・古田東朔の諸氏をはじめとする先学の個人研究と、前述の国立国語研究所近代語研究室の標本抽出法および全数調査による巨視的研究とによって、その言語体系の輪郭が明らかになってきた。今日までの明治時代語研究は、手ぎりの状態であり、模索の時代であった。しかし、おぼろげながら客観的データによって、明治時代語の体系と実態がわかってきた。そこにみられたのは、すでにI~Vで述べたように、身分制度と話し言葉の関係であり、表記・語彙・文体と書き言葉との深い関連である。そしてまた、巨視的考察も、微視的考察による確実な見通しの上にその効

果が発揮される。今後、音韻・文法・語彙・文体・表記の各分野にわたって、通時的、体系的、また個別的の研究の進展がのぞまれる。

国立国語研究所近代語研究室においても、明治百年の語彙の変遷を明らかにするため、目下、東京日日新聞を資料として、明治一〇年から一〇年間隔で昭和四二年までの調査を進めている。なおこの研究は、「現代語の形成過程に関する基礎的研究」(代表・岩淵悦太郎)という題目で、昭和44~46年にかけて科学研究費補助金の交付を受けた。

最後に、国立国語研究所の今日までの研究の中から、明治時代語の特色と問題点を示す語彙をいくつかあげておこう。

2 東京(漢字音に関するもの)

首都「東京」の名称は、「自今江戸ヲ称シテ東京トセン」という詔勅が慶応四年七月一七日に出されてきまつた。しかし、明治初期には、この「東京」に、トウケイとトウキョウの呼び方がならび行なわれた。たとえば、トウケイには、

千時明治第五年壬申ノ孟春吉旦東京浅草金龍山下ノ旅店(安愚楽鍋)

まだ東京を江戸と申しました頃(牡丹燈籠) 文三だけは東京に居る叔父の許へ引取られる事になり(浮雲)

など多くの例があり、トウキョウの例も

昨日手紙の中に書てあった東京の景況を見ちゃア(西洋道中膝栗毛)

また東京へ帰り浅草本郷と捜しましたが知れません(英国孝子ジョージ・スミス伝) 大江戸の都もいつか東京と(当世書生気質) のようにみえる。そして外国人のローマ字でしるしたものにも

Ma Tok6 de wa Kinnen ni nai yuki des ga

(E・サトウ Kuwata Hen, Part I, 1873) の例がある。本来、命名者は、どちらのつもりであったのか明らかでないが、トウキョウが力をえて今日に至っている。トウケイがみられるのは明治三〇年ごろまでのようである。金子春夢の「清水越」(明治二九年)には、

後からおい、東京の、茫然しねへで湯に這入んねへ、と言はれて と見える。

トウケイの「ケイ」は、「京」の漢音、キョウは呉音であるから、「京」は呉音に定着し

たことになる。このような、漢音と呉音のゆ
れているもの、交替した語は、明治時代にか
なりみられ、漢音↓呉音よりは、呉音↓漢音
に交代した語の方が多いようである。

なお、「京」は「京」とするものもあるが
「京」は「京」の異体字である。

3 文明開化（語構成に関するもの）

「文明開化」という四字漢語は、明治初期
の世相を指し示す代表的なことばであるが、
当時は今日のように四字漢語として慣用が固
定した語ではなかったようである。「開化」
だけの用例や「開化文明」という逆の例もあ
る。たとえば、

「追々我國も文明開化と号してひらけてき
やしたから」（安愚楽鍋）

五大洲の奇事ヲ知り、臥ノ萬里外ノ事情ヲ
察ス、文明開化ノ基本、蓋シ茲ニ在リト云
フモ可ナリ、（龍動新繁昌記）

「開化とやらの世の中じゃアにんげんハも
ちろんとりけものでも」（安愚楽鍋）

「何だところに行か無トヘムン飛た開化の
進まねへ野蠻だぞ」（西洋道中膝栗毛）

世道ノ開化ニ進ムニ至リテソノ事マヌト顯

ハレ（自由之理）

「何時迄立テモ太古ノ風俗ヲ去ルコトハ出来
ズ、遂ニ開化文明ノ域ニ至ルト申スコトハ
参ラスデゴザル、歐洲各國ノ当時ノ如ク開
化文明ノ邦ニナリタト申スモ、實ニ教導ノ
行届ク所カラ、（真政大意）

のようである。このような語構成の前要素と
後要素との順序の自由さは、ほかにも見られ
る。四字漢語では「進退出処」「専心一意」
などがみえ、三字・二字の漢語にも順序のゆ
れているもの、逆のものがある。「簡單」と

「單簡」、「抵抗」と「抗抵」、「熟練」と「練
熟」などは、よく知られている。なお前述の
II「新聞の用語」の1「郵便報知新聞の用
語」の「漢字語の構成」に同類の例がある。

4 写真（意味に関するもの）

「写真」というと、私たちはカメラで写し
たものを考えるけれども、明治時代には二つ
の意味で用いられていた。一つは、ありのま
まを写すという意味で、

文章ナルモノハ精神ノ写真ナリ（寿其徳奇
談・横山鉉呂久抄訳 明治一八）

前篇の趣向の如きハ專傍觀の心得にて寫眞

を旨としてものせしから（当世書生氣質）
などがあり、明治一八年には『ことばの写真
法』（丸山平次郎）という書物まで刊行され
ている。

これらの写真は「真を写す」と漢文流に返
り点をつけた意味であって、今日との時代の
差をうかがわせる。同様の意味構成をもつも
のに「当時」（今の意）、「閉口」（口を閉じる
意）などがある。

もう一つの意味はカメラで写す「写真」で
あって、明治時代においても用例が多い。

家屋相ヒ同ジト雖氏、物品相ヒ異ナリ、糕
菓ノ舗、写真ノ店、打球ノ場、（龍動新繁
昌記）

若し僕に徳ありて世人に知るゝことあらば
寫眞を鬻ぐ店前に政事家の一人と余眞影を
賣もせん（通俗花柳春話）

そのほか、「写真」に関する熟語には「写
真屋」（安愚楽鍋）、「写真場」（西洋道中膝栗
毛）、「写真店」（龍動新繁昌記）などがある。

5 貴重す（用法に関するもの）

今日、「貴重」という語は、「この品は、貴
重だ」「貴重な品」のように、いわゆる形容

動詞的に用いられる。しかし、明治時代には、サ変動詞に活用させた例がある。たとえ

ば、
是レ徒タニ人ニ貴重セラル虚名ノ富貴ニ非サルナリ（欧洲奇事花柳春話）

日ニ自由民権ノ貴重スヘキヲ知り（民権自由日本演説軌範 明治一四）

のようで、この用法は、『太平記』にも、みえており本来の用法であった。このように明治時代以後に用法のかわった語は、このほかにもかなりみられる。「結局」は、名詞（おわり）↓副詞（とうとう）へ、「大変」は、名詞（大変事）↓形動へ変化している。

6 時計と自鳴鐘（表記に関するもの）

今日、トケイという発音から思い浮べる漢字は、まず「時計」であろう。しかし、明治初期には、必ずしもこの「時計」ばかりでなく、数種の書き方があった。和文体の『通俗花柳春話』には、

玉漏の聲ハ辰の刻を報る頃に

微笑ながら辰器をながめ

胸に懸たりし時計を一視て打驚き

時器を見れば早丑刻に近づきぬ

女の刻の漏聲に皆ハ打驚き
折しも聞ゆる自鳴鐘の聲ハ今巳牌を報ると共に

のように、「玉漏・辰器・時計・時器・漏声・自鳴鐘」の六種類の表記がある。

ところが、漢文直訳体の『欧洲奇事花柳春話』には、「とけい」の語がなく、「自鳴鐘」がみえるだけである。

聞得タリ自鳴鐘ノ未牌ヲ報スルヲ

時巳ニ巳牌、壁間ノ自鳴鐘鏘々漏刻ヲ報ズトケイもジメイショウも漢語であるが、和

文体には、一般的用語のトケイが使用され、漢文直訳体には、近代中国語と考えられる自鳴鐘が使われている。

ともあれ、一語にいくつもの漢字表記がみえ、それが文体によって異なっていたのが、明治時代の実態であった。

7 亜米利加（外国名・地名に関するもの）

外国の国名・地名や人名に関して、明治初期にはいく通りかの約束があり、中でも広く行われたのが、地名は \parallel 、人名は \perp を右側につけることであった。たとえば、大島益纂訳『英史』（明治五年 文部省）には

紀元前五六十年ノ頃羅馬ノ將ジャリユース、シーザルト云者アリ
とあり、その例言には、

人名 \perp 姓及朝ノ名
地名 \parallel 國ス
物名 \perp 官名 尊称及爵位
官名 \parallel 國ス

とある。そして、国名の表記にも、多くの種類があった。アメリカを例にとると、

- (1) 仮名表記 a アメリカ・あめりか
- (2) 漢字表記 b 亜米利加・亜墨利加
- c 米利堅・米理堅
- d 米國・美國・合衆國・花旗

(國)・華旗 (國)

などの種類がある。そして、「美国」「華旗」「花旗」は中国語的性格をもっていたようである。

美国ノ旗ヲ建テ（龍動新繁昌記）
蓋シ華旗ノ郵船、（龍動新繁昌記）

（付記）本稿は I ~ V を飛田良文が執筆し、VI は梶原湜太郎と飛田が共同で執筆した。

（飛田良文）